

# 平成 24 年度 私立学校専門研修会・教育課程部会 実施報告書

\*\*\*\*\* 研究のねらい \*\*\*\*\*

## 大学入試センター試験と各大学の動向

本部会の研究目標は、学習指導要領の研究を通して、今後改訂される学習指導要領の編成過程において訴えるべき、私立学校の姿勢・意見を形成することにあります。今回は昨年に引き続き、大学入試センターから公表された「平成21年告示高等学校学習指導要領に対応した平成28年度大学入試センター試験からの出題教科・科目等について」、同センターの柴田洋三郎前試験・研究統括官を講師としてお招きし、その経緯及び基本的な考え方を中心に解説いただくことにしています。

また、各主要大学の入試担当者にご参集いただき、パネルディスカッション形式で、大学入試センター試験の利用についての考え方や、各大学がどのような目的で入試科目を設定し、また、どのような学生を求めているかを伺い、高校側からも意見を出し、討議できる場を設けています。

更に、「私立中学高等学校教育に関わる最新の状況」についての報告も、昨年に引き続き当研究所の中川武夫所長が行います。中央教育審議会第6期初等中等教育分科会臨時委員の立場から、今後の方向性についてご報告をいたします。

最後に、基調講演及びパネルディスカッション等を受けて、参加者間で、「高等学校学習指導要領改訂と大学入試センター試験」を主テーマとして、教育課程に係る現在の諸問題や今後の課題について、グループに分かれて研究協議及び意見交換を行います。

本部会は、前述のとおり、私学の教育課程について研究し、私学としての意見を今後の学習指導要領に反映させることを目的としております。本部会を通して、特に文部科学省等に意見・要望の必要がある場合には、日本私立中学高等学校連合会を通して、意見書・要望書等を提出していくことも視野においております。

- ◆ 会 期 ◆ 平成24年6月29日（金）
- ◆ 会 場 ◆ ホテルポール麹町 東京都千代田区平河町2-4-3
- ◆ 参加人員 ◆ 154名（募集定員150名）
- ◆ 参加対象 ◆ 校長、副校長・教頭・教務主任及び教育課程編成等担当教員
- ◆ プログラム ◆

①基調講演 演題「平成21年告示高等学校学習指導要領に対応した

平成28年度大学入試センター試験からの出題教科・科目等について」

講師 柴田洋三郎 前独立行政法人大学入試センター 試験・研究統括官  
公立大学法人福岡県立大学 理事長・学長

②パネル・ディスカッション

テーマ「大学入試センター試験と各大学の動向」

パネリスト 米本年邦 東北大学大学院工学研究科 教授／入試センター長

山田 朗 明治大学文学部 教授／副教務部長（入試担当）

木南 敦 京都大学大学院法学研究科 教授

本郷真紹 立命館大学 教授／副総長（入試担当）

コーディネーター 實吉幹夫 東京女子学園中学高等学校 理事長・校長

③報告 テーマ 「私立中学高等学校教育に関わる最新の状況 — 中高連・日私教研からの報告 —」

報告者 中川 武夫 一般財団法人日本私学教育研究所 所長

④分科会 全体テーマ 「高等学校学習指導要領改訂と大学入試センター試験」

— 平成21年度告示高等学校学習指導要領に対応した平成28年度

大学入試センター試験からの出題教科・科目とカリキュラム編成 —

テーマ 「大学入試センター試験と各大学の動向」

Aグループ 「高等学校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」

司会・指導助言 助川 幸彦 (芝中学高等学校 前校長)

Bグループ 「高等学校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」

司会・指導助言 大多和 聡宏 (開星中学高等学校 理事長・校長)

Cグループ 「高等学校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」

司会・指導助言 鈴木 秀一 (一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長)

Dグループ 「中高一貫教育校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」

司会・指導助言 中川 武夫 (一般財団法人日本私学教育研究所 所長)

Dグループ 「中高併設校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」(共学校)

司会・指導助言 山本 与志春 (青山学院中等部 部長)

Eグループ 「中高併設校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」(女子校・男子校)

司会・指導助言 清水 哲雄 (学校法人鷗友学園 常務理事)

◆ 日 程 ◆

6 月 29 日 (金)	9	30	10	30	11	12	13	14	15	16	30	17
	受 付	開 会 式	報 告	基調講演		昼 食	パネル・ ディスカッション		分 科 会	閉 会 式		

◆ 講師・指導員 (順不同) ◆

柴田 洋三郎 (前独立行政法人大学入試センター 試験・研究統括官)

米本 年 邦 (東北大学大学院工学研究科 教授/入試センター長)

山田 朗 (明治大学文学部 教授/副教務部長「入試担当」)

木南 敦 (京都大学大学院法学研究科 教授)

本郷 真 紹 (立命館大学 教授/副総長「入試担当」)

實吉 幹 夫 (東京女子学園中学高等学校 理事長・校長)

中川 武夫 (淑徳SC中・高等部 顧問)

◆ 専門委員・指導員 (順不同) ◆

清水 哲雄 (学校法人鷗友学園 常務理事)

助川 幸彦 (芝中学高等学校 前校長)

山本 与志春 (青山学院中等部 部長)

大多和 聡宏 (開星中学高等学校 理事長・校長)

鈴木 秀一 (一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長)

◆ 事務担当 ◆

川本 芳 久 (一般財団法人日本私学教育研究所 主幹)

田 淵 輝 夫 (一般財団法人日本私学教育研究所 主査)

◆ 日程・プログラム ◆

全体会場：ホテルルポール麹町 2階 ロイヤルクリスタル  
 〈司会/講師紹介〉 事務局長 鈴木 秀一

9:30	<p style="text-align: center;">受 付 ・ 資 料 配 布</p> <p>◆ 開 会 式                  1. 開会の辞                  2. 挨拶                  3. 研修会運営方針説明                  4. 日程説明                  5. 閉会の辞</p> <p style="text-align: right;">理事長 吉 田 晋                  所 長 中 川 武 夫                  教育課程専門委員長 清 水 哲 雄</p>
10:00	<p>◆ 報 告                  テーマ 「私立中学高等学校教育に関わる最新の状況                  一中高連・日私教研からの報告一」                  報告者 一般財団法人日本私学教育研究所 所長                  第6期中央教育審議会初等中等教育分科会 臨時委員 中 川 武 夫</p>
10:30	<p>◆ 基調講演                  演 題 「平成21年告示高等学校学習指導要領に対応した平成28年度大学                  入試センター試験からの出題教科・科目等について」                  講 師 前独立行政法人大学入試センター 試験・研究統括官                  公立大学法人福岡県立大学 理事長・学長 柴 田 洋 三 郎</p>
12:00	昼 食
13:00	<p>◆ パネル・ディスカッション                  テーマ 「大学入試センター試験と各大学の動向」                  パネリスト 東北大学大学院工学研究科 教授/入試センター長 米 本 年 邦                  明治大学文学部 教授/副教務部長(入試担当) 山 田 朗                  京都大学大学院法学研究科 教授 木 南 敦                  立命館大学 教授/副総長(入試担当) 本 郷 真 紹                  コーディネーター 東京女子学園中学高等学校 理事長・校長 實 吉 幹 夫</p>
15:00	<p>◆ 分科会                  全体テーマ 「高等学校学習指導要領改訂と大学入試センター試験」                  ー 平成21年度告示高等学校学習指導要領に対応した平成28年度大学                  入試センター試験からの出題教科・科目とカリキュラム編成 ー」</p> <p>Aグループ 《会場：地下1階 レスカル》21名                  テーマ 「高等学校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」                  司会・指導助言 助 川 幸 彦 (芝中学高等学校 前校長)</p> <p>Bグループ 《会場：3階 トパーズ》21名                  テーマ 「高等学校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」                  司会・指導助言 大多和 聡 宏 (開星中学高等学校 理事長・校長)</p> <p>Cグループ 《会場：3階 アクアマリン》19名                  テーマ 「高等学校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」                  司会・指導助言 鈴木 秀 一 (一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長)</p> <p>Dグループ 《会場：3階 アメジスト》36名 [(1)…18 (2)…18]                  テーマ 「中高一貫教育校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」                  司会・指導助言 中 川 武 夫 (一般財団法人日本私学教育研究所 所長)</p> <p>Eグループ 《会場：3階 オパール》19名                  テーマ 「中高併設校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」(共学校)                  司会・指導助言 山 本 与 志 春 (青山学院中等部 部長)</p> <p>Fグループ 《会場：3階 ガーネット》36名 [(1)…18 (2)…18]                  テーマ 「中高併設校の新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」(女子校+男子校)                  司会・指導助言 清 水 哲 雄 (学校法人鷗友学園 常務理事)</p>
16:30	<p>◆ 閉 会 式                  1. 開式の辞                  2. 専門委員長挨拶(総括)                  3. 閉会の辞</p> <p style="text-align: right;">専門委員長 清 水 哲 雄</p>
17:00	

## ◆ 概 要 ◆

平成24年6月29日（金）、ホテルルポール麹町（東京都千代田区）にて、「平成24年度全国私立中学高等学校 私立学校専門研修会 教育課程部会」が開催された。

本部会は、学習指導要領の研究を通して、今後改訂される学習指導要領の編成過程において訴えるべき、私立学校の姿勢・意見を形成することを目標としている。

今回は昨年に引き続き、大学入試センターから公表された「平成21年告示高等学校学習指導要領に対応した平成28年度大学入試センター試験からの出題教科・科目等」を検討を要する喫緊の課題と捉え、また、その大学入試センター試験を各主要大学がどのような目的で利用しているのかということに焦点を当て、「大学入試センター試験と各大学の動向」を研究のねらいとした。参加人数は募集人数を超え、154名となった。

実施内容については、下記のとおりである。



## ◆ 報 告 ◆

「私立中学高等学校教育に関わる最新の状況—中高連・日私教研からの報告—」

**報告者 一般財団法人日本私学教育研究所 所長**

**第6期中央教育審議会初等中等教育分科会臨時委員 中川 武 夫**

### 研究所の主な業務

まず、研究所の主な業務についての報告があったが、本件については、日本私学教育研究所のホームページに詳細が掲載されているので、本報告では省略する。

### 教育界を取り巻く環境

学校はブラックボックス化しており、その評価は出入口、つまり入学者学力レベルや入学試験倍率と大学の進学結果などで判断される。学校は、預かった生徒に対し、その生徒に合った教育をすところである。この部分は全く評価されない。また、事が起こると、政治やマスコミはすぐに処理をしないと騒ぐが、学校教育は50年後100年後を見据え長いスパンで考えていくもので、失敗は許されない。某大学の先生が絶対に教育に介入してはいけない人種は政治家とマスコミだというふうに言っている。

しかしながら政財官界と良い関係を保たなければ教育界は成立しないと考えている。現状では、教育界は政財官界につつき回され、マスコミに攻撃されて萎縮している。これでは教育界は成長できない。政財官界とマスコミは教育界に対して環境を整え、温かい目、長い目で見守っていただきたい。

### 喫緊の課題

現在、教員免許制度が大きな問題になっている。その中でも教員免許の修士レベル化の問題は、教員が一定の研修を積み、修士レベルになれば免許を切り替えるというような案になっているが、学士だけでは悪い先生なのかという疑問もある。この制度が仮に実現した場合、修士レベル化の講習にかかる費用は誰が負担するのかという問題がある。現行の教員免許更新講習も三万円程度の費用は原則自己負担である。修士レベルの講習となると更なる負担となる。ま



た、講習期間中は欠員が出る。学校の運営に非常に大きな影響を与える恐れがある。

なお、免許状更新講習に関連し、登録忘れの問題が浮上している。講習を受けただけでは更新は終了しない。学校の所在する都道府県教育委員会で登録をして更新が完了となる。登録忘れが発覚した場合はすぐに本人が自己責任において教育委員会に相談していただきたい。

次にインターナショナルバカロレアの（IB）の問題である。文科省がグローバル化を推進するために、IBやTOEFL等を掲げて大きな問題になりつつある。世界中で導入されているIB等について理解しておくことは重要である。

三番目に中教審が取り上げているのが学校間の接続の問題がる。本来は学校段階間の接続等に関する作業部会等で各段階別の学習内容をつなげていくことが会議の主題だったが、中高一貫校や小中一貫校についての議論に主眼が置かれているようである。

最後に、教育課程の編成である。私立学校の歴史は、学習指導要領に対して距離を置くことであったが、未履修問題で学習指導要領に従わなければならないという傾向が強くなってきた。教育課程については当研究所の研修会を活用頂き、疑問点等は問い合わせていただきたい。

#### ◆ 基調講演 ◆

「平成21年告示高等学校学習指導要領に対応した平成28年度大学入試センター試験からの出題教科・科目等について」

講師 前独立行政法人大学入試センター 試験・研究統括官

公立大学法人福岡県立大学 理事長・学長 柴田 洋三郎

#### はじめに

平成21年3月に高等学校新学習指導要領が告示され、高等学校では数学と理科は平成24年度から、その他は平成25年度から学年進行で開始される。これに伴い、大学入試センター試験では平成27年度から数学と理科、平成28年度からその他の科目の出題が、新指導要領に対応した教科科目で行われる。本講演では、出題科目の内容等の解説と今後の検討状況、それに関連して平成25年度から変更されるセンター試験の実施方法の説明等を行っていただいた。



#### ●背景と動向

##### ○社会状況と大学入試の変容

文部科学省が大学改革実行プランを出し、大学教育の質的転換と大学入試改革がテーマとなっている。入試関係では質保証、意欲・能力・適性の多面性があげられている。グローバル化に対応した人材として入試でTOEFLやTOEICの活用推進や秋入学への対応があげられている。

高校段階での学力状況を多面的客観的に把握する様々な仕組みの検討として高大接続テスト等が考えられているようである。

センター試験については参加する大学が増えているが、今後、抜ける大学も予想される。得点の成績提供数は年々増えてきている。そのためセンター試験の受験生が多様化し、作問、依存度、難易度、利活用の分化等の問題が生じている。

##### ○平成24年度センター試験の検証報告

24年度の大学入試センター試験では、地理歴史公民における配付ミス、ICプレーヤーの輸送ミス等、様々なトラブルが起こっている。

検証委員会が立ち上がり、検証結果が出された。反省点は、監督要領の改善、問題冊子の分

冊化、試験時間割の設定方法の不適切、ICプレーヤーの輸送の改善、センターと各大学間の連絡体制があげられる。

### ●平成25年度入試センター試験の変更について

平成25年度センター試験の主要な変更点は、ポイントは地理歴史と公民を単一教科として扱うということである（詳細は5月31日付の「平成25年度大学入学者選抜大学入試センター試験実施要項参照）。さらに変更点として、事前登録が出願後の変更を1回だけ認めることになった。また、2科目受験者の1科目の科目成績の利用は、第一解答科目成績を優先することを大学に継続して依頼することになっている。

### ●平成27年度入試センター試験「理科」について

詳細は大学入試センターのホームページを参照していただきたいが、特に注視すべき点をいくつか報告する。

23年3月に最終まとめを公表したが、24年度センター試験の検証結果から改善点を指摘され、単純化した案となった。現段階では、A（基礎4科目から2又は1科目選択解答）、B（基礎を付さない4科目から1科目を選択解答）、C（基礎4科目から2又は1科目と基礎を付さない4科目から1科目を選択解答）、D（基礎を付さない4科目から2科目を選択解答）で検討している。

上記については平成24年7月24日に大学入試センターから次の通り変更したとの発表があった。A（基礎4科目から2科目を選択解答）、C（基礎4科目から2科目と基礎を付さない4科目から1科目を選択解答）、BとDは変更なし。

なお、現在検討中の事項であるが、理科の基礎科目の出題範囲で、「発展」問題があるが、除いて作題する方向である。また、Dの場合は実質6単位科目で、過重と指摘され、軽量化の方向である。さらに解答方式で、Cの場合で同一名称科目の選択についてはあくまで検討中であるが、認めざるを得ないと考えている。

最後に移行措置の問題であるが、現在は理科総合AB、理科ⅠⅡの4科目で、旧課程履修者を27年度にどう収容するかが非常に複雑で、円滑に継続できるやり方が懸案として残っている。

### ◎質疑応答

Q：平成27年度の最終決定は。

A：平成25年6月には文書として周知される。その前の段階での告知は流動的である。最終的には来年の5月末か6月に次年度の試験の実施要項が発表される。それには間違いなく今回話していることは明記されるはずである。

Q：受験申込時の理科の受験パターンは事前登録なのか。

A：A、B、C、Dの選択については事前登録でないと難しいと思う。

Q：変更締切以降、志望校の変更ができなくなる場合があるが。

A：D+Aという受け方を認めるかどうかである。Dの時間帯とAの時間帯は別と想定しているので、それを認めるかどうかになるが、検討中である。

### ●平成28年度センター試験からの出題教科・科目

5月17日発表の「平成21年告示高等学校学習指導要領に対応した平成28年度大学入試センター試験からの出題教科・科目等について（最終まとめ）」についての解説であるが、内容については大学入試センターホームページ等を参照していただきたい。

### ●最後に

現在の入試には様々な機能が込められすぎている。大学では教育水準、学生の質の評価指標等、そして高校においては「学力の状況の把握」、「高校における幅広い学習の確保」、「高校

生の学習意欲の喚起」がセンター試験に期待されている。しかしそれらは本来、高校教育で担うべきものである。大学進学希望者の能力、適性の判定だけを入試の機能としてみなすということが機能分散で望ましい。

また、教科の知識偏重の入試から、意欲、能力、適性等の多面的、総合的評価で選抜する入試への変換が望まれている。ペーパーテスト偏重入試から、志願者の意欲や能力等総合的な評価に基づく入試へということで、レベル型の成績提供による資格試験的な取扱い、クリティカルシンキングを問う新たな共通テストの開発、大学グループ別の入学者共同選抜システムの導入、志願者と大学が相互理解を深める時間をかけた創意工夫ある入試の促進等の検討が必要と考えている。

産業界等はレプリカ型の人材養成に適した選抜ではなく、諸外国で行っている創造力豊かな人材が初等中等教育から育てられるような制度を取り入れてはとの意見も出ている。例えば、国際バカロレア、イギリスのOCR (Oxford Cambridge Royal society for Arts)、オックスフォード大学やケンブリッジ大学のThinking skills assessment、これらが産業界から要請されている。

### ●質疑応答

Q：教科「情報」の29年度以降の導入が検討中ということだが、「社会と情報」と「情報の科学」2分野のうち、どちらが要望され、導入の可能性が高いのか。

A：分野としては「情報と社会」の方の要望が強いと認識している。

Q：センター試験は、その前身から、大学生・国民として基礎・基本的なものを大学が求める試験としてスタートし、出題も教科書の範囲に限定されると理解しているが、その考えは変わっていないか。単純化を求めるとのことであるが、多様化に対応するため二次試験同様の私案を示して頂いたが、今後、センター試験の方向性は、科目を統合し単純化するのか、細分化して個々の大学対応のために複雑化するのかについてどのような見解をもたれているのか。

A：現方式は限界で、変革を必要とする。大学評価・学位授与機構との統合も転機と思っている。大学サイドの対応、高大接続テストの動き等との流れで進んでいくと思っている。センターは大学の共通利用機関であり、統一的に実施できるものを提供するというスタンスは変えられない。大学入学者選抜の意識が日本全体で変われば、センター試験も自ずと変わってくると思う。

### ◆ パネル・ディスカッション ◆

#### 「大学入試センター試験と各大学の動向」

パネリスト	東北大学大学院工学研究科 教授／入試センター長	米 本 年 邦
	明治大学文学部 教授／副教務部長(入試担当)	山 田 朗
	京都大学大学院法学研究科 教授	木 南 敦
	立命館大学 教授／副総長(入試担当)	本 郷 真 紹
コーディネーター	東京女子学園中学高等学校 理事長・校長	實 吉 幹 夫

午後からは「大学入試センター試験と各大学の動向」をテーマとし、パネル・ディスカッションを行った。パネリストには東北大学大学院工学研究科の米本年邦教授・入試センター長、明治大学文学部の山田朗教授・副教務部長、京都大学大学院法学研究科の木南敦教授、立命館大学文学部の本郷真紹教授・副総長の4名の先生方をお招きした。各先生方は大学で入試を担当されている。コーディネーターは当研究所副理事長、東京女子学園中学高等学校の理事長・校長の實吉幹夫先生にお願いした。

## ●パネル・ディスカッション実施の目的と意図

【清水哲雄教育課程専門委員長】

各大学が具体的にどのような形で入試をとらえているのか。また大学がやっていきたいことや高等学校への要望、さらに高等学校から大学への要望などを議論し、高等学校と大学との垣根を低くしていきたい。



## ●はじめに

【コーディネーター：實吉先生】

「大学入試センター試験と各大学の動向」をテーマとして進めていくが、四つの項目立てをする。一つは各大学の大学入試センター試験の利用について、二つ目は各大学の個別入試について、三つ目は各大学が高等学校に求めるもの（学力、教育内容、質、望む人材等）について、最後に高等学校から大学入試に求めるものについて、参加の先生方から大学の先生方へ意見・要望ということで進行する。

●各大学の大学入試センター試験の利用について（どの科目をどのような目的、あるいは意図を持って利用しているか。あるいは設定しているか）

【東北大学 米本先生】

他の旧帝大に比べてAO入試の割合が多いことが特徴である。入試は実質的には一般入試とAO入試で、センター試験と組み合わせて行っている。

前期試験の場合は全学部でセンター試験を課し、個別学力試験のウエイトが大きい。AO入試は1から4期までであり、3期はセンター試験データと面接、小論文試験で行うが、全学部で行っており、センター試験のウエイトが大きい。

【明治大学 山田先生】

大学入試センター試験利用入試は前期日程で全学部、後期日程で4学部が参加しており、センター入試のみで合否判定をするが、地方入試と同等の役割がある。センター試験利用入試、全学部統一入試、個別入試となるべく受験機会を多くしている。

【京都大学 木南先生】

センター試験の利用については、5教科満遍なく勉強した成果で基礎的な部分を問うという利用を心掛けている。配点は学部ごとに違う。現在はセンター試験がないと大学入学試験は成り立たない。センター試験の働きは基本的にセンター試験の点数を利用し、受験生間でセルフセレクションを働かせ、結果出願数が膨大にならない点である。

【立命館大学 本郷先生】

以前は、個性尊重の入試にもかなりのウエイトをおいていたが、大きく方針転換し、一般入試定員を多く配するようになったが、その中でセンター試験の果たす役割は非常に大きい。全国に31カ所で独自入試会場を設け一斉に行っているが、センター試験利用入試もかなりのウエイトをおいて実施している。高校生の学力を検証し合格させる方針であり、前期は5教科7科目型、5教科型、3教科型入試の3タイプ、後期試験は4教科型入試で、4パターンを基本にセンターだけで判定するタイプを設定した。また、センター試験と独自入試併用入試を各学部が設けているが、センターだけでは大学のアドミッションポリシーが出せないためである。

## ●各大学の個別入試について

【立命館大学 本郷先生】

かつてのAO入試・推薦入試ではなく学力検証入試に重点化した方向に転換している。数年前から公募制推薦を廃止し、AO入試も人数を精選し、入試内容もかなり頑張らなければなら

ないような入試に変えていて、志が高く、アピール度がないと合格できない。アドミッションポリシーは、文系学部では主は3教科型で、国語・英語・選択科目であるが、選択科目に地歴公民と合わせ数学を入れている。

【京都大学 木南先生】

センター試験では高等学校の基礎的学力は一通り勉強してくることを求めている。個別学力検査は、論理的思考力や言語的表現力が高等学校課程で相当程度まで到達しているかを確認する。各学部で教科科目を選んでいる。関連して、地理歴史は個別学力検査問題を作成している国立大学は少ないが、京都大学文系では地理歴史は勉強して、100字から200字程度の説明ができる能力を求めている。理科は枠内に文字等を書き込むことになるが、国語や数学は、白紙の解答用紙に教科特有の論理をたどり、考えた結果を記述してもらう試験である。配点割合は個別学力検査にウエイト置いている。



【明治大学 山田先生】

入学定員の7割は一般入試で、センター入試、全学部統一入試、一般選抜入試があり、全学部統一入試が特徴的で全国8都市9会場で行う。これは地方入試としての性格もある。AO入試もあるが各学部で様々である。特別入試枠は最近はやや縮小している。基本的に基礎学力を判定した上で、モチベーションとコミュニケーション能力を重視した選抜を行う。推薦入試は明治大学の3つの附属校と各学部で推薦した指定校の入試となる。

【東北大学 米本先生】

個別入学試験は基本的には外国語（英語）と数学は全学部で課している。英語は全部共通である。数学は文系は数学Ⅱ(B)まで、理系が数学Ⅲ(C)まで入る。あと一科目は、文系は国語、理系は理科である。後期入試は経済学部と理学部で行われる。経済学部は数学と外国語、理学部は数学と理科となっている。医学部には一般入試で面接試験がある。AO入試は大学の特徴となっていて、入学者は平均的には成績が良い。

●各大学が高等学校に求めるもの（学力・教育・人材等）について

【東北大学 米本先生】

- 偏差値で進学先が決定することはある程度仕方ないが、大学で学びたいという気持ちを持たせていただきたい。
- 学部選びは将来の職業にかなり連動している。将来の職業観をしっかり持たせていただきたい。大学入学だけを目標にすることは是非やめていただきたい。
- グローバル化ということで、英語を使うことが多くなった。大学院等に進む場合、語学が試験のウエイトを占める。高校の段階から生徒に意識を持たせていただきたい。

【明治大学 山田先生】

- 各学部でアドミッションポリシーを出しているが、どの学部でも確実な基礎学力と、向上心ある人を求めている。入学して終わりではなく、入学してからが勝負と思えることが大事である。大学入試で挫折を味わっても、そこから頑張れる意欲、向上心を持った人を求めている。
- 語学を含むコミュニケーション能力。コミュニケーションが苦手な友達を作れず、大学生活が上手くいかないこともある。
- 出身地に対する関心が低い。世界や日本社会に対する問題意識を持つことも良いが、自分の地域の抱えている問題や良さも見据えていただきたい。

【京都大学 木南先生】

- どういう場（教育課程等）で学んだ生徒を卒業させているのかははっきりしたことが分かるとうり難い。また、教科については基礎的なことはしっかり学ばせて欲しい。
- 英語は高等学校で平均で1週間250分～300分の授業があるが、大学は、平均で週90分であり大学では英語力は伸びないため自分でやらなければならないが、基礎的なところを高等学校の3年間の中でやって、それによりギャップを乗り切れるような人にしていただきたい。
- 自分の前にある選択肢を検討し、どのように見え、先には何があるかということについて、自ら問題を設定する力をつけてほしい。問題を設定する力の基礎になる高等学校の教育課程の実施というものを期待している。

**【立命館大学 本郷先生】**

- 大学では学習をさらに進めることも必要だが、学問をしなければならない。学問は自分の学びに、疑問点・課題を見つけ、分析し、新たな可能性を提示し、新たな評価を出すということである。自分で思い描く、仕上げる内容は自分自信が持つべきキャリアビジョンである。ビジョンがなければ努力目標は設定できない。大学選びは自分に一番適しているかを見計らうことである。各大学のスタンスは全然違う。比較的余裕のある高校一・二年生で多くの大学に関する資料を取り寄せ、自分から主体的に様々な情報を得て、自分に合った大学かを見計らった上で、進学を決定し、それを目標にして努力する過程が最も重要である。

**●高等学校が大学入試に求めるもの**

**【京都大学への質問】**

京都大学は入試を検討していて、高等学校でいろいろな角度で能力を持った子を見つけられるよう選抜制度を検討するという報道があったが、その関連事項についてお伺いしたい。

**【京都大学 木南先生】**

個人的には、大学改革と前期日程試験一本（後期日程試験をしていない）でいいかの検討の二つの流れの合流と理解している。内容は一定の事績があった場合、評価し、高等学校調査書の特記をもう少し展開してもらい、入学者選抜で新しいことができないかを各学部を検討を要請したと聞いている。

**【立命館大学への質問】**

各大学で学士力の教育が求められているが、入試との関連付けをどのように考えているのか。

**【立命館 本郷先生】**

基本的には確かな学力の土台の上に豊かな個性を花開かせるのが人間力、学習力と思う。今までは豊かな個性のみに目をとられ、大きく膨らませることに力を注いできた。しかし確かな学力がベースに無いといけない。まず高等学校までの段階で確かな学力をつけ、大学ではそれを継承しつつ、クラブ活動、留学、ボランティア体験等の課外体験を通じて個性をより伸ばしていくことが求められると考えている。

**【明治大学への質問】**

入試では大学のイメージの影響が大きいと思う。明治大学のイメージが、以前と変わってきていると感じているが、大学側でどう受け止めているのか。

**【明治大学 山田先生】**

明治大学は以前は男子学生を中心とした大学で、現在も7対3で男子が多い。他大学には女子学生を確保する点では強力なブランドイメージを持っているところもある。大学としては、教育の中身として男女共同参画社会の担い手を目指し、カリキュラムや授業内容、授業題目に打ち出していった。教育の中身をpushした上で、オープンキャンパス時に、女子学生に意識的にアピールした。しかし、やはり施設の改善は大事で、トイレの改修、パウダールーム設置を行

い、掃除を徹底している。

#### 【東北大学への質問】

多様な入試は、高校生がじっくりと勉強する機会を奪ってしまっている。基礎的な知識を考えているならば、高校生に勉強させる時間を与えて欲しい。その上で育成された生徒をとるといのが本来の大学の在り方ではないか。高校では3年間の学びの場を維持できず崩壊していくと教員は感じているが、どういうふうと考えているのか。

#### 【東北大学 米本先生】

11月末に合格通知すると、高校ではクラスの中で様々な問題が起こると聞いている。東北大学に合格している生徒は、高等学校から指導を受け、かなりの生徒がセンター試験を受けてはいるが、周囲に対するモチベーションを下げないようにと考えている。なお、入学前教育として、通信教育で大学一年時の授業の一部を先取り履修させている。多様な入試は高校には迷惑であるが、我々の事情もご推察いただきたい。

#### 【東北大学への質問】

AO入試で早い時期に簡単な面接だけで合格発表をする大学があり、何故AO入試を続けるか聞くと、上位大学がやっているからやめられないと言う。AO入試、特に面接だけで合格させる入試は是非やめて欲しいと思うが、東北大学がAO入試を続けるという社会的な責任をどう考えているのか。

#### 【東北大学 米本先生】

東北地方は人口が少なく、また東京大学や京都大学にネームバリューでも及ばない。その中で優秀な学生を入学させたいが、例えば800名の定員で、一般入試1回だと1番から800番までを合格させる。AO入試を事前に行って、300名合格させると、一般入試では500番まで合格となる。つまり、一般入試だけだとボーダーラインが下がってしまう。ボーダーを下げたくないのが正直なところである。迷惑と言われると心苦しいが、大学の事情も推察いただきたい。



### ◆ 分科会 ◆

#### 全体テーマ 「高等学校学習指導要領改訂と大学入試センター試験」

昨年度同様、研修会の最後のプログラムとして分科会を行った。今回は、「新学習指導要領に関するカリキュラム編成等」について、「高等学校」（A・B・Cグループ）、「高校男子校および女子校」、「中高一貫校」（Dグループ）、「中高併設校」（E・Fグループ）の5グループに分かれ、さらに人数の多いグループ（D・Fグループ）はグループ内で2グループに分かれ各校の現状、問題点等について協議、情報交換が行われた。

なお、司会はAグループは助川幸彦専門委員（芝中学高等学校前校長）、Bグループは大多和聡宏専門委員（開星中学高等学校理事長・校長）、Eグループは、山本与志春専門委員（青山学院中等部部長）、Fグループは、清水専門委員長（学校法人鷗友学園常務理事）が担当した。CグループとDグループについては、参加された先生に司会進行をお願いした。Cグループは水戸女子高等学校の長谷川英治先生に、Dグループについては、カリタス女子中学高等学校の江口正道先生と金城学院高等学校の田中武彦先生に司会進行をお願いした。

Aグループでは各校のカリキュラム編成等の現状について話し合われた。新教育課程の理科の件が大部分であったようである。もっとも焦点となっている部分であり、その点は良かった

ようであるが、他の現状もテーマとして欲しいという意見もあり、時間が少なかったようである。

Bグループは各校の問題点について協議が行われた。中でも習熟度別クラス編成の話題が活発だったようである。

Cグループは理科のカリキュラム編成や単位数の件の他、各学校のでのコース間評定格差についての意見交換が行われた。

Dグループは2グループに分かれての協議であったが、一つ目のグループでは、土曜日の活用、中高一貫校のカリキュラム特例措置の実践例、道徳、総合的な学習の時間などについて協議が行われた。もう一グループは特に理科の取り扱いについて話し合われた。この件に関しては、各学校はかなり苦慮されているようである。

Eグループは各校の取り組みについて協議が行われたようであり、特にチューター制に関することが話題となったようである。

FグループもDグループ同様2グループに分かれた。一つ目のグループでは授業時数と理科の履修に関する問題が主な話題であったようである。各校の取り組みをディスカッションすることで、各参加者は大いに参考になったようである。二グループ目は今回の新学習指導要領と大学入試センター試験で大きな課題となっている問題であったため理科に関するテーマが大部分を占めたようである。なお他の問題についての協議を行いたいといった意見もあった。

#### ◆ 総括 ◆

##### 学校法人鷗友学園常務理事、東京私学教育研究所所長 清水 哲 雄

最後に、清水専門委員長が挨拶を兼ね、本研修を総括した。

清水委員長からは、現在、新学習指導要領とどう対峙し、どのように取り組んでいくかと言うことは大きな課題で、研修会で取り扱わざるを得ないものであるが、今後はその中身の学習内容について考えていくことが大きなテーマになっていくと話された。

今回の研修会で協議、情報交換を行った先生方同士、研修会後も連絡を取り合っていて欲しいこと、さらに、今回扱うことができなかった問題については、日本私学教育研究所に問合せいただきたいと述べ、総括とした。



#### ◆ 参加者アンケートより（概要） ◆

報告「私立中学高等学校教育に関わる最新の状況—中高連・日私教研からの報告—」について

現在、進行している教育改革に関する情報や文科省等の実情につき、参加者にとって、日常なかなか触れることのできない情報の報告であったため、新鮮であり、自分達でも考えていかなければいけないと認識されたことがうかがえる。また短い時間であったが、多くの課題に触れたため、研究所の活動報告により、参加者の研究所の活用を考えていただく契機となったように思われる。

基調講演「平成21年告示高等学校学習指導要領に対応した平成28年度大学入試センター試験からの出題教科・科目等について」について

大学入試センターの情報について、未確定部分がかなり多いなか、今後の展望的な話が中心となり、参加者の先生方は若干、物足りなさを感じているようであったが、状況等の理解と今後の予想を聞いて、カリキュラム編成等の参考になるといった感想も多かった。

パネル・ディスカッション「大学入試センター試験と各大学の動向」について

各大学の入学試験の考え方について、短い時間ではあったが、AO入試、推薦入試等の面からも話をいただき、参考になったという意見も多かったが、もっと、大学側とのディスカッションを望む方も多かった。大学の高校に望むものについては、かなりの参加者が参考になったようである。

分科会

全体的に、分科会で各校の現状を聞き、意見交換を行うことは有効で、今後も続けて欲しいと意見であるが、問題点として、時間が少ない、人数が多い、テーマをもっと絞って欲しいなどの意見があった。

#### ◆ 都道府県別参加者数 ◆

都道府県名	参加人数	都道府県名	参加人数	都道府県名	参加人数
北海道	3	石川	—	岡山	1
青森	3	福井	2	広島	9
岩手	—	山梨	1	山口	2
宮城	3	長野	1	徳島	—
秋田	—	岐阜	1	香川	1
山形	2	静岡	1	愛媛	—
福島	4	愛知	20	高知	—
新潟	2	三重	3	福岡	5
茨城	5	滋賀	2	佐賀	1
栃木	2	京都	4	長崎	—
群馬	2	大阪	6	熊本	—
埼玉	1	兵庫	8	大分	1
千葉	6	奈良	2	宮崎	1
神奈川	13	和歌山	—	鹿児島	2
東京	27	鳥取	1	沖縄	4
富山	—	島根	2	計	154